

事例を読む

重なり合う時間

水倉みゆき

● 広がる

『直接かかわらない時間の中で体験していることと、直接かかわる中で体験していることは、つながりながら蓄えられ、かわりを豊かにする』（宮里）。

子どもと向き合っていると、確かに子どもの中で静かに広がっていく時間を感じる瞬間があり、そういう時にむしろ大人は、子どもに対してうかつに声を掛けることができなくなってしまうように思う。子どもの中の時間がどこに向かって広がっているのか、R夫と一緒にジャノメチョウを探したことを「旅」と表現されたのは、そのあてどなさを言われたのではないだろうか。宮里さんはその中で、R夫を一人

の旅の仲間として頼りにし、その落ち着いた態度を尊敬に近い思いで見つめると同時に、自分の旅の仕事をも見直している。

考えてみれば、虫探しに限らず、日々の保育それ自体がすでに、自由自在にどこかに向かっているとする子どもの心に保育者が随行する時を孕（はら）んでいる。そんな時に保育者は、どこに行こうとするのかはわからないままに、とりあえずひたすら子どもに付き合ってみようと覚悟を決めるしかない。大人が考えた計画の中で子どもを動かそうとする時と違って、互いに先が見えない旅の時間の中では、保育者も子どもも同じ一人の人として対峙（たいじ）する瞬間がやって来る。そこでは保育者自身がむき出しになる怖さもあるが、それよりも何かが新しく見えてくるという期待のほうが大きいように思う。

一方の篠原さんは、S夫と一緒に虫探しをしたずっと後になって、その時を振り返り、携帯していた小さな「凶鑑」の、S夫にとつての意味の深さにハツとする。S夫は、「凶鑑」という未来を切り開く

道具を携え、先生と共に未知の世界に向かう旅をしていたのかもしれない。このように、保育の中では思い出すことによって、後から気付かなかった出来事が見えてくることもある。そんな意味でも、子どもの遊びに付き合うことは、一緒に旅をすることと似ているのではないか。旅は、「行こう」と決めて楽しみにするところから始まり、旅が終わって「こんなこともあった」と思い出を振り返るところまで続いているのである。

旅といえば、生涯をアラスカの旅に生きた、写真家星野道夫は、著書『旅をする木』（文藝春秋）の中で、少年だったころ、自分が東京で暮らしている同じ瞬間に、同じ日本でヒグマが日々を生き、呼吸をしている……ということがどうにも不思議でならなかったと書いている。そして、「おそらくその時に子どもながらに、知識としてではなく、感覚として世界を初めて意識したのではないか」と、その時を振り返る。未知の世界を感じる時、初めて人は外の世界——他者の存在——を意識する。R夫やS夫に

とつても、小さな虫探しの旅は、自分とは違う世界を生きる他者に向かう時間だったのだろう。そして、保育者は、その旅に同行し、その経験を支える仲間だったのである。

この、お二人の文章を読んでいたら、以前見たこんな場面をふと思い出した。ある幼稚園の三歳児の部屋での出来事である。一人の男の子が何かを考えているかのようにじーっと動かずにいた。まだ六月、園の生活によく慣れてきたころのことだ。そこに先生がやって来ると、男の子は先生に近づいて、「コンピューターを作りたい」と一言言った。先生が静かに、「その箱や紙はどれを使ってもいいのよ」と言うと、男の子は最初、先生のスカートに触れていたのだが、そのうちゆっくりゆっくり箱を探し始め、一つひとつをじっくりと見定めてから、おぼつかない手で貼り合わせ、コンピューターなるものを作り上げた。まるで哲学者のような顔をして。そして出来上がると先生に見せ、先生がにっこりされたのを見て、さもうれしそうに自分もほほ笑んだ

のである。日常の、何でもない場面である。保育者が子どもを見守りつつ援助したと表現されるような出来事だったのだが、そんな型どおりの言葉では語り尽くせない。存在感がそこにはあった。大人と子どもという枠を超えて、「人が自分のやりたいことをじっくり自分の中に探した末に、やり遂げることができるといことは、こんなにも幸せなことなのだ」ということが、見ていた私に実感として伝わってきたのである。この時も、男の子の思案の旅に、先生はさりげなく同行されていたに違いない。この旅は、自分の中にあるイメージを形にするという、三歳児にはちよつと難しい旅だったことだろう。先生は、その大変な部分に必要なだけ、そつと手を添えられたのである。

『直接かわらない時間の中で体験していることと、直接かわる中で体験していることは、つながりながら蓄えられ、かわりを豊かにする』。

お二人の虫探しについての魅力的な論考に触発されてこのように私の中に蓄えられていた多種多様

な時間たちもまた、ゆらゆらと「今」という水面に浮かんできた。そしてその途端、この言葉がストンと腑に落ちたのである。

同じ道に立って同じ景色を見ている、人はそれぞれ自分の旅の中にいる。保育の中での子どもと保育者もちろん同じだろう。それぞれの広がりや重なり合う一点において、保育者と子どもはささやかに「今」をつくっている。

●重なり、一つになる

先日、授業で学生同士絵本を読み合っていたら、一人、とても心に沁み入るような読み方をする学生がいた。長くて、少し地味な話を選んでいたのだが、「子どもに合っているか」とか「上手に読んだか」などという評価を超えた魅力があった。後で彼女の書いた小レポートを見てあつと思つた。「私が読む本は母さんが大好きだったから。私も読んでいて大好きな本です」とあつた。彼女の声の中には、お母さんに読んでもらつた豊かな時間があり、それが聞い

ている者の胸に実感として確かに届いたのだ。母に読んでもらう時に、彼女の中に「何かを探す時間」が息づいていたのである。R夫とS夫にとつての虫は、彼女には「絵本」だった。この目に見えない時間の豊かさは、普段はその人の中にひっそりと沈んでいるが、ふとした時に現れて周りの人を潤していく。

ホスピス「野の花診療所」の医師である徳永進は、何人もの人をそこで見送ってきた人だが、人生の終わりを目前にした患者さんに「今、何かやりたいこととがありますか」と尋ねると、普段ごくあたりまえにしてきたことを望む人が多いという。それは「ビールが飲みたい」だったり「道を歩きたい（スーパ―に向かう道のような普通の道を）」だったりと、願いがかなう^レというような特別なことではなく、日常の中で意識されずに埋もれているあたりまえのことが多いというのだ。徳永はそれを「普通という奇跡」と呼ぶのだが、おそらくその中には、その人が味わってきたさまざまな時間が重ねられているのだろう。その人は、外からは見えない豊かな人生の時間

を、「ビールを飲み」、「近所の道を歩き」ながら振り返っていたのだ。そこには、地に足の着いた、生き生きとたくましい^レ生^レの姿がある。

『探し、手に入れる時間は、自分自身を探し当て作り上げていく時間ともいえるのではないか』（篠原）。旅の中で蓄えられた時間は、このようにしてその人の中に積み重なり、静かにその人の^レ生^レを形作っていく。塗り重ねられていく時間が、まさにその人自身の色合いを醸し出していくのである。

私たちは^レ共感^レとたやすく言うけれど、子どもが泣いている中に、また笑い転げている中に流れている^レその人の時間^レにはそんなに簡単に触れられない。だからこそ、せめて保育者は、日々子どもと同じ道を歩きながら、『何かはわからないけれど確かにそこにあるものを共に味わおうと』（篠原）一緒に何かを探すのである。（常葉学園短期大学）

注 徳永進は『こんなときどうする?』（岩波書店）の中でこのことについて思索し、NHK番組「爆問学園」FILE 14で、こう表現した。